

布教資料

第10集

新しい檀信徒の ために

やさしくできる入檀式の手引き

基本編

準備

差定と役配

入檀式作法

応用編

五戒授与を加えて

修養会として

参考資料

浄土宗総合研究所

新しい檀信徒のために

●やさしくできる入檀式の手引き

《基本編》

第1章 準備

第2章 差定と役配

第3章 入檀式作法

《応用編》

第1章 五戒授与を加えて

第2章 修養会として

第3章 参考資料

はじめに

教化宗団を標榜しているわが宗に籍を置く者として、檀信徒教化をどのように推進すればよいか、これは常に脳裏から離れない問題です。しかし、思考の段階からいざ実践に移す場合は、なかなか容易ではありません。その一つが新しい檀信徒に対する教化法です。

これまでは、僧侶と檀信徒との関わりは、住職に就任したときからごく自然に師檀の關係が結ばれているので、檀信徒が死亡し、その家族が後継者となったときでも、改めて特別な儀礼を行って祭祀後継者と認めることはあまりしませんでした。しかし近年、地域開発などで人口の変動が多くなり、それに伴い墓地の需要が増加しています。それらの檀信徒をどのように寺が受け入れたらよいかを検討し、対策を立てる必要がでてきました。

教団は帰敬式を実施するように指示していますが、寺（僧侶）側では古来からの教化法である、五重相伝や授戒会を実施しないと教化者として責任を全うできないと考えていることが多いようです。特に近畿圏の寺では、数年に一度実施することが寺檀一致の不文律となっているようでもあります。また定期的な五重相伝、授戒会を実施しにくい地域では、地域に存在する本山で定期的に開催される会中に、自坊の檀信徒を送り、信行策励、安心

決定の教化を実施しています。

しかし今、新しい檀信徒を迎えようとするとき、すぐに本山へ行って御法主台下からお剃度（おかみそり）を受けてもらいたいというよりも、まずこれから住職があなたの師匠となり、一生の間、信仰の相談相手となり、御本尊様の救済を頂けるよう、簡単な儀礼を行いますからお受け下さい、という教化儀礼が求められているのではないのでしょうか。そして五重相伝、授戒会は信仰がつぎの段階に進んでから、と考えてもよいのではないのでしょうか。

当研究所においては、現代教化儀礼研究の一環として、今回の儀礼を考え、準備、役配、差定、参考資料を整理し、誰にでもすぐ実施できることを目的として構成してみました。

このたび、その実践研究の成果を出版するにあたり、熊井康雄専任研究員をはじめとする関係者各位のご努力に対し、深く感謝の意を表すものであります。

平成十年三月

浄土宗総合研究所主任研究員 福西 賢兆

はじめに

序 章 入檀式で仏縁を結ぶ

《基本編》

第一章 準備

日時の決定 案内状の作成 記念品の準備 表白の作成 入檀証の作成
本尊の準備 控室の準備

第二章 差定と役割

差定(次第) 入退堂用音楽 音声 役割と衣帯

第三章 入檀式作法

42

33

15

1

《応用編》

第一章 五戒授与を加えて

差定

52

第二章 修養会として

概要 日程(時間割) 準備 差定・衣帯

56

第三章 参考資料

導師説草 教導要領 勸誠資料

67

あとがき

94

●序 章——入檀式で仏縁を結ぶ

新しく檀信徒となつて菩提寺と仏縁を結ぶ場合、その事情はさまざまですが、一般的には次のようなケースが多いのではないのでしょうか。

□親が死亡して祭祀を継承した場合

寺に檀家があれば、必ずいつかは起こり得る状況です。昔は親から子へ、子から孫へと、その家に伝承されてきたさまざまな心得が伝えられたのですが、最近では核家族化の影響もあつて、親から何も聞いていない、仏事に関しては皆目わからないという継承者が増えています。このようなケースは継承者本人が困るばかりか、寺院にとつてもマイナスになりますから、祭祀を継承する心構えを教え、菩提寺との絆を強めるように導いていくことが大切でしょう。

□新規に寺院墓地の取得を希望して檀家となる場合

最近の都市部で最も多いケースと考えられます。檀信徒の縁者や知人であれば、寺院に対する一応の認識があるかも知れませんが、石材店等の業者が紹介してきた場合には、墓地の取得が第一で、お寺の宗旨等は二の次ということが少なくありません。菩提寺と檀家の在り方等、事前に十分な話し合いを持つことは勿論ですが、入檀（墓地取得）後にそれなりの機会をもつて、檀家になったことを意識させることがとくに重要でしょう。

□墓地とは別に菩提寺としての結縁を希望して信徒となる場合

寺と縁を結びたいという気持ちを持つている点では、最も理想的なケースと言えるでしょう。せっかく信仰に目覚めているのですから、この機会を逃さずしっかりした関係を築くべきでしょう。

いづれにせよ、新しく檀信徒を迎える場合には、何らかの方法で「このお寺の檀家（信徒）になった」という意識を持ってもらうことが、教化の第一歩になります。

絆を深めるための儀礼

浄土宗の宗規（註）には、

新たに檀信徒になろうとする者は、その旨を寺院に申し出て、その仏前において帰敬の誠を宣誓する帰敬式を受けなければならない。

と規定され、次のような差定（註）が指示されています。

道場洒水

入堂

香偈

三宝礼

奉請

歎仏偈

表白

導師転座

説示開導

(1)合掌・礼拝・十念の受け方

(2) 本宗の本尊・祖師の恩徳

(3) 安心・起行・作業の綱要

(4) 信者の心得

(5) 三帰三竟の大意

(6) 罪障懺悔

入信者焼香・三拝 灌頂

入信者懺悔

灌頂

授与三帰三竟

授与日課

授与帰敬証

授与十念

帰敬誓約

導師復座

開経偈

誦經

發願文

摂益文

念仏一会

総回向偈

十念

総願偈

三唱礼

送仏偈

十念

退堂

宗の規定によるまでもなく、新しい檀信徒に対して帰敬式を行うのは、寺檀関係強化の上から、とても重要なことなのですが、実際に行っている寺院はどのくらいあるのでしょうか。浄土宗総合研究所の「教化に関するアンケート調査」^{注3}によると、施餓鬼・十夜等の定期法要や葬儀・追善法要等の臨時法要以外に、何らかの形で教化活動を行っているという回答し

のうち、帰敬式を実施している寺院は約七%でした。回答割合が少ないため一概にはいえませんが、特別には教化活動を行っていないという寺院も含めると、帰敬式を実施している割合はもっと下がり数%程度になるものと推測されます。地域差はありますが、五重相伝や授戒会といった大規模な伝法儀式の実施率が高いのに比べて、比較的簡単にできるはずの帰敬式を行う寺院が極端に少ないのは何故でしょうか。

浄土宗が定める法要の中で、寺院が檀信徒を教化し、念仏信仰を深めることを目的に行う儀式には、帰敬式のほかに、五重相伝・授戒会・剃度式・結婚式等があります。五重相伝や授戒会は正式な伝法道場ですから別として、帰敬式・剃度式・結婚式に共通する導師（和上）の作法の内容を比較してみると、

□帰敬式

説示開導

懺悔

灌頂

授与三帰三竟

授与日課

□剃度式

和上開導

灌頂

灌頂

授与三帰三竟

授与日課

□結婚式

告諭

灌頂

懺悔

授与三帰三竟

日課勸奨

となります。

共通していえることは、一、式の意義と受ける心構えを説き、二、懺悔文をとなえ、三、香水を頭上にそそいで心身を清め、四、仏教徒として三宝に帰依する約束である三帰三竟を授け、五、浄土宗の念仏信者として日課称名を勧める、という基本パターンです。つまり、これだけの内容を授ければ、檀信徒と仏縁を結ぶ儀礼としては十分だということです。ただ、帰敬式の場合ネックとなるのは、説示開導です。合掌・礼拝・十念の受け方等はよいとしても、祖師の恩徳、安心・起行・作業の綱要、信者の心得を説くとすると、そう簡単にはいきません。このあたりが帰敬式が一般化しない原因の一つかもしれません。

今回、新しい檀信徒と仏縁を結ぶ儀式を考えるにあたって、最も問題になったのはこの点です。

結論からいえば、説示を省略して、開導、つまり式を受ける心構えだけを説くことにしたので、これならば容易に、しかも短時間で済ませることが出来ます。しかし、そうになると帰敬式としては略式で内容も異なりますから、これを帰敬式と呼ぶには少々無理があります。名称をどうするかが次の問題です。帰敬とは仏に帰依して敬い尊ぶことで、篤い信仰心が前提にあります。これに対して、新しい檀信徒は、多くの場合まだ信仰心は希薄

でしようから、まず檀家（信徒）になったという意識を持ってもらうことが必要です。

そこで、この式を一応「入檀式」と呼ぶことにしました。新しく寺檀の縁を結んだときこそ、絆を強めるチャンスです。信仰を培うのはそれからということですが、もちろん、実際に各寺院で行う場合にはこの式を「帰敬式」と呼んでも差し支えないでしょうし、その他にも「入信式」「結縁式」等、いろいろな名称が考えられると思います。

集団式と個別式

寺院で儀式や行事を行う場合、二つの形態に分けることができます。施餓鬼や十夜等、大勢の檀信徒が一堂に会するものを集団式、追善法要等、一軒ごとに行うものを個別式とする分け方です。

入檀式を実施する場合も、集団式か、個別式かを選択する必要があります。どちらにも利点や難点があるでしょうが、帰敬式の場合は、前出のアンケート調査の回答内容から判断すると、集団式の方が多く行われているようです。

小人数でできる儀式

儀式は立派にしようと思えばいくらでも立派にできます。ただし、その分人手も必要になりますし、当然ながら費用もかさんできますから、簡単にはできないということになります。今回のテーマである入檀式の場合も、この点は重要なポイントです。一般の寺院では、通常の法要は住職一人か副住職と二人で勤めるということが大半ですから、入檀式を行う場合もできる限り寺院内のスタッフで実施することを考えるべきでしょう。

新しい行事を実施しようとするとき、誰でもまず考えるのは、
専門的な知識や技量がなければ勤められないのではないか？

ある程度のスタッフ（人数）が必要だ

準備もやや大掛かりなものになりそうだ

ということですが。これでは、容易に実施する訳にはいきません。そうこう考えあぐねている間に時間はたつて機を逸する、そんな経験はどなたもお持ちのはずです。

新しい行事はなぜ実施しにくいのか、これには二つの要因が考えられます。

第一は慣れていないことです。慣れていけば、多少手間のかかることや大掛かりなことでも、さほど困難には感じません。多くの寺院で勤められている施餓鬼や十夜などがよい例です。まず実施してみることをお勧めします。もしはじめはうまくいかないことがあっても、何回か行ううちに要領は飲み込めてくるでしょう。

第二は行い方が分からないことです。先に述べたように『浄土宗法要集』には帰敬式の差定が定められていますが、項目だけで詳しい内容は記されていませんから、おのずから自分で考えなければなりません。どのような話をすればよいのか、作法はどうするのか……つい億劫でやめてしまう、というのもよくあることです。

マニュアルを活用する

この本は、そのような場合に活用していただくことを目的として編集されています。いわば入檀式のマニュアルであり、話の台本でもあります。教化に熟達された諸大徳には無用の長物かもしれませんが、経験の少ない青年住職にはきつと参考になるはずで、億劫がらずに、まず実践していただきたいと思えます。

さて、この本は次のように構成されています。一度全体をご覧になったうえでご自身で必要と思われるものを選択されることをお勧めします。教化法は人によって様々です。自分の寺の檀信徒にはまずこれから、そう思うものを選んでみてください。

■ 基本編

基本的な入檀式のマニュアルです。檀信徒一軒ずつを対象とする個別式がベースになっています。

□ 第一章 準備

日時の決定・案内状・入檀証・記念品・表白類など事前の準備、本堂の荘厳・控室の準備などについて説明します。できるだけシンプルで効果的なものを考えました。

□ 第二章 差定と役配

差定・役配・衣帯など実施にあたって必要なことを説明します。住職と副住職の二人、あるいは住職一人で行えるような方法です。

□第三章 入壇式作法

入壇式の差定にそつて重要な説草(導師の話の内容)と作法を「話し言葉」で載せました。そのまま読むことも可能ですが、内容を把握して、ご自分の言葉で話せばより効果的です。

■ 応用編

基本編に加えるオプションです。入壇式をもう少し進めて在家の仏教信者が守るべき五戒を授ける法会や、勤行・礼拝等を取り入れた修養会形式の法会を考え、その場合に利用できる勧誡・説草・オリエンテーション・日程等の資料を載せました。修養会の場合は、個別式ではなく、集団式を想定しましたが、基本の式に必要なものだけを加えて、個別式の独自法会を考えることもできると思います。

□第一章 五戒授与を加えて

入壇式で授与した三帰は、三宝を敬う気持ちを持って仏教徒としての生涯をおくる約

束をすることですが、これをもう一步進めて、具体的に日々の暮らしの在り方を伝えることを内容とする方法を考えてみました。戒の精神として七仏通誠偈を説き、実践としては五戒を授与するものです。

□第二章 修養会として

三帰・五戒授与を中心に、勸誠・勤行・礼拝等を組み入れた、半日程度でできる修養会の実施案です。拘束時間が少々長くなり、昼食の準備等も必要になりますが、儀式だけでなく勸誠を行うことにより、よりわかりやすく仏教徒・念仏信者としての心構えを伝えることができるでしょう。

□第三章 参考資料

応用編に必要な、授与五戒の導師説草、教導（オリエンテーション）要領、勸誠講話資料を収載しました。導師説草と教導要領は、基本編同様に話し言葉で載せてあります。

注 1

「檀信徒規程」(宗規第五号) 第三条

注 2

『浄土宗法要集』上卷一三八頁

注 3

『宗報』平成九年一・二月号にて実施。集計報告は『教化研究』第九号に掲載。

基本編

●第一章——準備

日時の決定

「今度お檀家になった○○さんの入檀式をしよう」そう思い立つたらさっそく準備に取りかかりましょう。なにごともしタイミグが大切です。実施の時期は入檀からあまり日をおかないほうがよいでしょう。入檀者の都合を考えれば仕事は休みとなる日曜祭日が望ましいのですが、近ごろはお寺の方も休日には法務が多く多忙ですから、週休二日制が定着しつつあり休日のケースが多い土曜に実施するのもひとつの方法でしょう。いずれにしても入檀者と相談のうえ決定することになります。

案内状の作成

日時が決まったら、案内状を作ります。あらかじめ打ち合わせを行っているのですから、省略してもよいのですが、入檀者にとっては菩提寺における初めての儀式になりますので、正式に案内状を出すと喜ばれるでしょう。内容は入檀式の意義や日時等を記しますが、出席者の人数も確認するようにしておく準備に好都合です。

拝啓、〇〇の候、貴家皆様にはご清栄のことと存じます。

さて、このたび貴家におかれましては、当寺を菩提寺と定め、檀信徒としてのご縁を結ばれましたことは、み仏様並びにご先祖諸霊の導きによるものと存じ、心からお慶び申し上げます。

つきましては、当寺の檀信徒とられたことを正式にご本尊様にご報告する入檀式を左記により執り行いたいと存じます。入檀式はこれから浄土宗の教えに従い、み仏様、ご先祖様に感謝の心をもって、明るく正しく仲よく日々をおくることを誓うため、当寺の檀信徒として最初にお受けになる大切な儀式です。ご夫妻はもとより、ご家族おそろ

いでご出席くださるようご案内申し上げます。

合掌

平成〇年〇月〇日

浄土宗 〇 〇 寺

〆 〇 〇 家 入 檀 式 〵

日時 平成〇年〇月〇日（〇曜日）〇時集合

式場 〇〇寺本堂

☆所要時間は、控室での説明などを含めて約一時間程度です。

☆準備の都合上、ご出席の人数を〇月〇日までにお知らせください。

記念品の準備

入檀式の記念として数珠二連と袈裟二肩を準備します。別に数珠と袈裟に決まっている訳ではありませんが、式の中で数珠と袈裟の授与を行いますから、この二つが適当でしょ

う。もちろんこのほかに何か記念になるものを添えてあげても結構です。従来は檀信徒への記念品は一軒一つが普通でしたが、入壇式の場合には夫婦を家族の代表と考えて、一対を一組とすると喜ばれるでしょう。

《数 珠》

浄土宗の数珠は念仏の数を数えるためのもので、式の中でも数珠を授与した後に日課誓約(日課念仏の奨め)を行います。そのためにも通仏教的に用いられている一連のものではなく、日課数珠が適当です。

【三万遍と六万遍】

日課数珠には二種類あります。珠の数が二十と二十七の組み合わせの数珠(珠の大きいものⅡ三万遍)と、二十七と四十の組み合わせの数珠(珠の小さいものⅡ六万遍)で、男女の区別はありませんが、普通は三万遍を男性用、六万遍を女性用とすることが多いようです。

《袈裟》

袈裟は仏弟子の表示として釈尊が定められたものです。我々僧侶（出家）は、如法衣などの三衣（九条以上・七条・五条の三種類の袈裟）を着用しますが、在家信者には威儀細または輪袈裟（正式には種子衣といいます）が適当でしょう。入檀記念や寺名・氏名等の文字を刺繍（数量が多ければ織り込み）するとよい記念になり喜ばれます。

【威儀細と輪袈裟】

袈裟としては威儀細のほうが正式ですが、威儀細は五重相伝や授戒会を受けると、剃度式で授与されますし、普段の着用しやすさを考えると、輪袈裟のほうがよいでしょう。生地は金欄や派手な柄物はなるべく避けて、長く使えるように落ち着いた色のものにしたほうが無難です。

表白の作成

式中に用いる表白文を作成します。「新訂浄土宗法要集」上巻三一八頁の帰敬式表白を用いても結構ですし、これに若干手を加えた例文を左に載せましたので参考にされてもよいでしょう。奉書に清書して「表白」と表書きをした畳紙たとうしに包んでおきます。

謹んで按ずるに、如来の大悲は万機を普く利益し給い、最後の一念に至るまで、皆悉く摂化し給う。況んや至心に懺悔して、三宝に帰依する者に於てをや。

爰に入壇を請う善男子善女人○○○○夫妻は、仏日の光を受けて、仏性の萌芽を発し、如来の正法を信じて、浄土の法門に入り、衆善奉行せんと欲す。仍て本月本日を以て、○○寺本尊前において入壇の式を挙げんことを希う。

我が身を顧みるに、戒行元より整わず、信必ずしも堅固ならずといえども、宗祖法然上人一化八十年、選択本願の念仏弘通に思いを致して、我が心身を捧げ、一心称名、偏に

仏祖の冥護を奉請して、三宝帰依、日課称名念仏の作法を授けんとす。

仰ぎ冀くは、本尊阿弥陀如来、教主釈迦牟尼世尊、六方恒沙の諸仏諸菩薩等、哀愍覆護して、所願意の如く成就せしめ給わんことを。敬って白す。

入檀証の作成

私たちは、形になったものを求めがちです。ものごとを成し遂げたときには、その証しとなるものがあるとうれしいものです。入檀式の場合も、式を受けたことよって仏教徒としての誓約は済むわけですが、入檀証を授与すれば菩提寺と結縁できたことが形に表され、その感慨は一層深まることでしょう。

入檀証は『新訂浄土宗法要集』上巻一四一頁に記載されている「帰敬証」に準じましたが、別にも幾つかの例を掲載しましたので参考にして作成してください。

紙は檀紙(表面に細かい皺のある和紙)が最上ですが、手に入らない場合は奉書を用います。横長に二つ折りにし、折り目を下にして左右を三つに折る、いわゆる三つ折りの形に

するとよいでしょう。また、入壇証を墓地使用許可証と兼ねる場合などは、市販の表彰状用紙を用いると、額に入れて仏壇の上などに飾ることができてよいかもしれません。

入壇証の例

(1) 『浄土宗法要集』上巻一四一頁の

「帰敬証」を参考にしたもの

入 壇 証	(氏 名)殿	<p>○ ○ 寺の阿弥陀如来 前において如法に入 壇せしことを証す</p>	平成○年○月○日 ○ ○ 山 ○ ○ 寺 ○ 譽 ○ ○ ○
-------------	-----------	---	--------------------------------------

(2) 別例

入 壇 証	(氏 名)殿	<p>篤 敬 三 寶 奉 佛 崇 祖</p>	平成○年○月○日 ○ ○ 山 ○ ○ 寺 ○ 譽 ○ ○ ○
-------------	-----------	----------------------------	--------------------------------------

本堂の準備

本堂は、帰敬式や剃度式に準じて荘厳すればよいでしょう。お寺の本堂は、極楽を象っているにもかかわらず、なぜか不祝儀のイメージで見られがちです。入壇式は、新しく檀信徒になった人がみ仏様とご縁を結ぶおめでたい儀式ですから、それなりの雰囲気を出すようにしたいものです。しかし住職を中心とした寺族だけで準備することですから、あまり大掛かりなことは不可能です。次のような点に心掛けて飾ってみてください。

■本尊前

日本では、昔から赤は祝儀、黒は不祝儀の色とされていますから、本尊前の飾りも赤を中心に用います。

□供物

紅白饅頭、リング等赤系統のものを供えましょう。また、供物の敷紙にも赤色を重ねておめでたい雰囲気を出します。

□仏花

生花も赤系統の色花を多く入れます。

□燈明

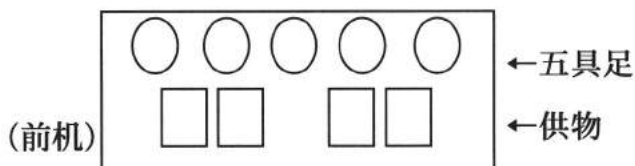
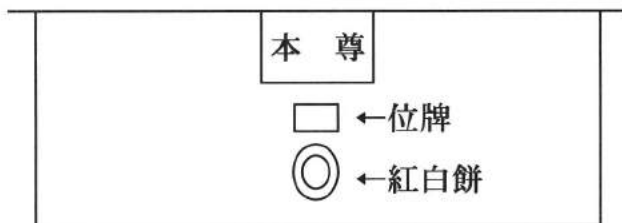
紅ローソクを用います。

【供物の供え方】

供物の供え方にも、いくつかの心得があります。菓子類は作るのに手間のかかるものが上位とされ、普通は、干菓子(落雁等の打菓子)、生菓子(練菓子・餅菓子等)、水菓子(果物類)の順とされています。

供えるときは、上位のものを内側に並べるのが原則ですが、違う種類のものを一対とする場合は向かって右に上位のものを、同じ種類のもの一対とする場合は向かって右に色の濃いものを並べるようにします。また、いくつかの供物をあげる場合には外側が高くなるように盛り付けると形がよいとも言われています。

《本尊前の荘嚴》



華籠 表白香炉香盒



■内陣

□先祖霊牌

入壇の喜びはご先祖様の御霊にもご報告しなければなりません。仏前の適当な場所に先祖代々の位牌を安置し、香華燈明を備えます。位牌には「○○家先祖代々霊位」と書けばよいのですが、追善法要のイメージを出したくない場合には「○○家代々尊位」等でもよいでしょう。いずれも赤で縁取りするなど工夫してみてください。

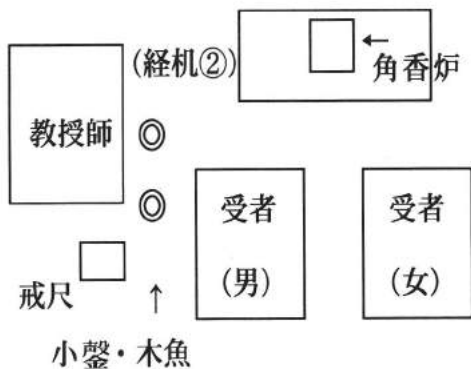
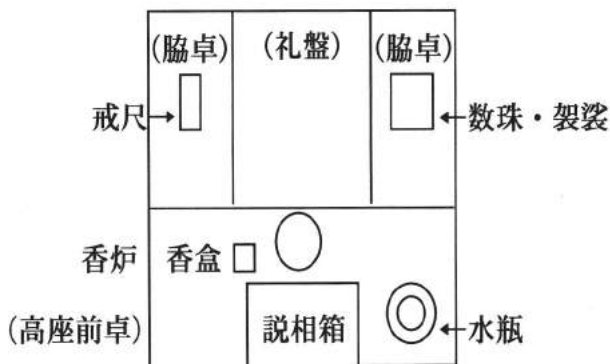
□導師座

仏前に導師座を設けます。経机と拜敷を置き、経机の上には香炉・香盒・表白を準備します。その左側に三方を置き、華籠を載せておきます。

□高座

高座（または二畳台）を外陣向きに設けます。導師が作法する場所ですから、受者との位置関係に注意します。前卓が内外陣境に接するようにすると都合がよいでしょう。前卓上には香炉・香盒・説相箱（説草を入れる）・水瓶・燭台一對、脇卓上には戒尺・数珠と袈裟（三方にのせる）を準備します。

《内陣・高座付近の荘厳》



□受者席

受者席は、高座前卓と接する位置に夫婦二名分を設け、中間に経机を置いて、その上に角香炉を用意します。座る位置は、結婚式では男性が右側、女性が左側とされていますが、この場合は通例にしたがって男左女右がよいでしょう。最近では正座の生活に慣れていないため、椅子を用いることも多くなりましたが、この場合は導師との目線の高低に配慮することが必要で、導師と受者が同じ高さか、導師の方がやや高くなるくらいが適当です。

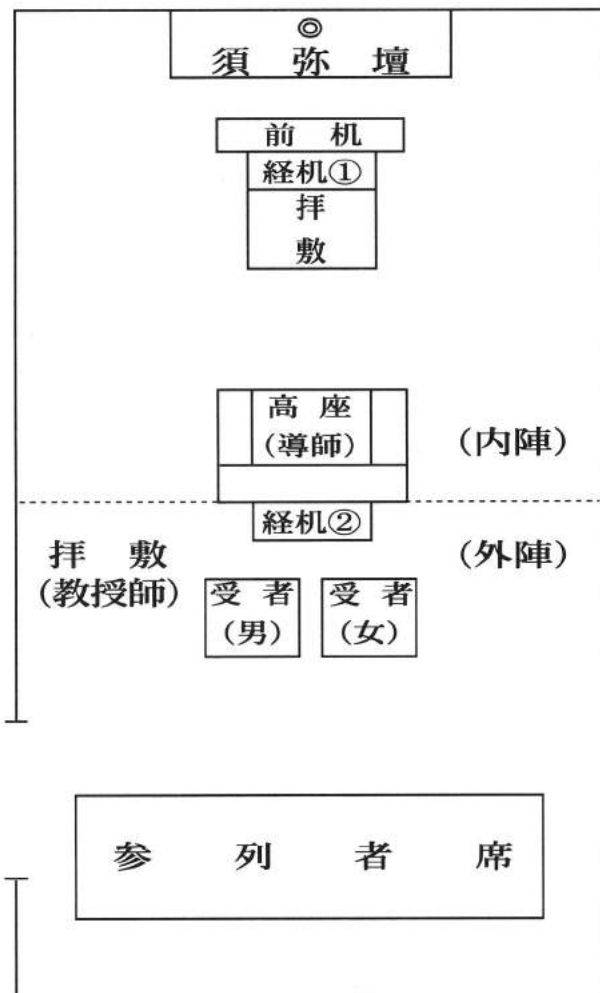
□家族席

夫妻以外の家族は、参列者として同席し、ともに聴聞してもらいます。そのため、席を受者の後方に設けておきます。

□教授師席

受者席の左または右側に教授師席を設けます。教授師席には拝敷を敷き、小盤・木魚・戒尺を用意します。

《本堂内の配置図》



控室の準備

控室は、お茶や菓子との接待とともに、入壇式の心得等を説明する場所になります。なにごとも第一印象が大切ですから、室内は清浄にして迎えたいものです。

□床の間

床の間にはお名号の掛け軸を掛け、中央に香炉を置きます。生け花も適宜に整えましょう。

□塗香器

本堂入堂前に、心身を浄めるため塗香を行います。本来は本堂入り口で作法するのですが、役配者の都合もあるので今回は控室で行うことにしました。そのための塗香器を控室に準備しておきます。

【搔敷】

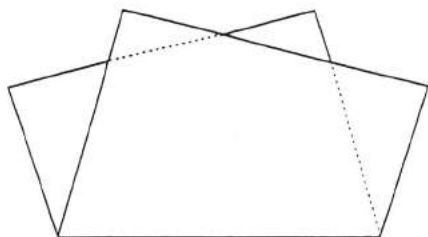
お客さまに茶や菓子をもてなすとき、菓子の下に敷く紙を搔敷かいしきといます。もともとは神仏に供物を供えるときに敷くもので、折り方に吉凶があるとされています。間

違えないように折ってください。

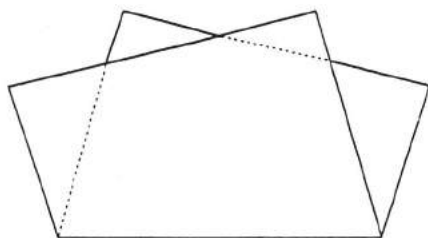
搔敷の折り方（折り目を仏前・先方へ向けます）

（祝儀・平常）

（不祝儀）



（折り目を手前にして右が上）



（折り目を手前にして左が上）

●第二章——差定と役配

差定（次第）

浄土宗のほとんどの法要の差定は、日常勤行式が基準になっていますから、入壇式の差定を考える場合も、これに準ずることになります。しかし、法要は種類によって趣旨が異なるものですから、一概に香偈から送仏偈まで勤めればよいというものでもありません。

差定を決めるのに重要なことは、

- ① 目的とするものは何か
- ② どのくらいの規模で行うのか
- ③ 所要時間はどのくらいが適当か
- ④ 差定のどこに重点（ポイント）をおくか

を明確にすることです。これらを入壇式の場合で考えてみました。

①の目的は、宗規の文言をかりれば「入檀者が仏前において帰敬の誠を宣誓する」ことつまり仏法僧の三宝に帰依し、仏教徒また念仏者として生活することを誓うことです。儀式としては、三帰三竟の授与および日課念仏の誓約ということになるでしょう。

②の規模については、すでに述べたとおり住職と副住職の二人、場合によっては住職一人で実施できること、受者は夫婦二人、参列者としての家族を加えても数人を想定していただきますから、ごく小規模な法会と考えられます。

次に③の所要時間ですが、一般に仏教儀式は重厚長大（重々しきはあるが時間がかかりすぎる）と受け取られることが多いのではないのでしょうか。初めての菩提寺の儀式が長時間になると、以後、お寺の行事等への参加を敬遠することにもなりかねませんから、なるべく時間がかかりすぎないようにしたほうがよいと思います。

最後に④のポイントをおく部分ですが、やはり入檀式では授与三帰三竟等、導師から受者への作法が中心となりますので、この部分をなるべく分かりやすく丁寧に行いたいものです。もちろんその他を粗末にしてよい訳ではありませんが、③との兼ね合いを考えて必要最小限に止めてみました。

以上の四点を心掛けて作った差定は次のようなものです。

教導

受者参列者入室

開式の辞

喚鐘

導師入室

無言三拝

奉請

表白

転座

受者焼香

先祖霊牌礼拝

導師開導

懺悔

灌頂

授与三帛三竟

控室で十念の受け方等を説明し塗香を行います

三通三下

三奉請散華(音声の項参照)

外陣向きに転向して登高座します

仏縁と先祖の御霊に香を捧げます

仏縁を感謝し先祖の御霊に礼拝します

入壇式の心得を述べます(以下資料③導師説草参照)

今までの誤った考えや行いを懺悔します

仏様の清らかな水で身と心を清めます

明るく正しく仲よく生きること約束します

授与袈裟

授与数珠

日課誓約

授与入檀証

授与十念

撰益文

念仏一会

転座

請護念偈

十念

無言一拜

導師挨拶

導師退堂

閉式の辞

受者退堂

仏教徒の表示である袈裟を授けます

念仏を唱えるための数珠を授けます

念仏を離れず生活することを約束します

仏縁を結んだことを証する入檀証を授けます

切り十念で十遍の念仏を授けます

下高座して本尊向きに転向します

【差定と次第】

私たちは、ふだん法要の形式を定めたものを差定と呼んでいます。しかし、本来は例え
ば導師・維那・侍者等の役配、礼讃等の句頭の当役、散華や行道といった威儀等を細か
く指示したものを差定といい、単に偈文等を読誦する順番を定めたものは、正式には次
第と呼びますが、ここでは一般的な呼称である差定を用いておきます。

入退堂用音楽

入退堂に、仏教讃歌・詠唱・雅楽等の音楽を用いるのも良い方法です。CDやカセット
テープを使用する場合は、住職と副住職が式に携わっていますから、取り扱いは寺庭婦人
が行うことになります。入退堂にふさわしいテープやCDを、いくつか挙げてみます。

□衆会・四弘誓願

浄土宗児童教化連盟 『輪をつくろう』

仏教讃歌普及委員会 『仏教讃歌Ⅰ』

浄土宗出版室

浄土宗CDシリーズII

『仏教聖歌』

□ 入堂和讃・退堂和讃

浄土宗吉水講

『吉水流詠讃歌・和讃篇』

□ 雅楽（CD）

浄土宗出版室

『雅楽―法要・儀式のために―』

日本コロムビア

『雅楽への招待』実用編

日本コロムビア

『GAGAKU』

音声

浄土宗のお経はとて有り難いとよくいわれます。これは用いられている旋律が、日本人の感性にとけあっているからでしょう。せつかく素晴らしい節をもっているのですから、普段の法要にも節付きの偈文や礼讃をぜひ取り入れたいものです。

今回の入壇式の差定の中では、節付きの偈文として奉請があげられます。奉請には、ご承知のとおり「三奉請」と「四奉請」があります。四奉請の節付きはよく用いられていますが、三奉請の節付きはご存じない方が多いようです。これは善導大師の『浄土法事讃』に出てい

る偈文で、普通の三奉請に「散華樂(さんげらく)」を付けて唱えるものです。簡単な節ですから、取り入れてみてはいかががでしょうか。音声(節)と威儀(散華)は次のとおりです。節を付けない場合でも「散華樂」で散華をすると良いでしょう。

二二 奉 請 (散華)

下無 平調 老越 盤涉
六 ウ ・ ヨ 山

● 盤一下 華籠捌き
● 二下 起立

奉^ウ— 請^ウ— 弥^六 陀^{六ウ} 世^ウ— 尊^ウ— 入^{ヨウ}— 道^ウ— 場^ウ— 散^ウ— 華^ウ— 樂^{ウ山}く

奉^ウ— 請^ウ— 釈^ウ 迦^ウ 如^ウ— 来^ウ— 入^ウ— 道^ウ— 場^ウ— 散^ウ— 華^ウ— 樂^ウ

採華 散華

奉^ウ— 請^ウ— 十^ウ 方^ウ 如^ウ— 来^ウ— 入^ウ— 道^ウ— 場^ウ— 散^ウ— 華^ウ— 樂^ウ

採華 散華 華籠捌き 着座

役配と衣帯

今回の入檀式は、住職と寺族で行うという設定ですから、役配も住職・副住職・寺庭婦人の三名で分担してみました。もちろん住職一人でも実施は可能です。この場合は、副住職が務める教授師の役目も住職が併せて行うこととなりますが、式自体はシンプルなものですから、さして困難はないと思います。

■役配

□導師

住職

入檀式を中心となる役です。受者に仏教徒としての心構えを説き、三帰三竟を授け、日課念仏を奨めます。

□教授師

副住職

受者に入檀式の心得や作法を説明し指導します。また維那と司式も兼任します。

□接待

寺庭婦人

控室への案内や茶菓接待を行います。

■衣 帯 へ導師・教授師は時期により領帽を着用します

□導師

道具衣 相当服（僧階により決められた色の法衣）を着用します

大師五条 正式には七条ですが大師五条でもよいでしょう

誌公帽子

切袴

儀式には切袴・莊嚴数珠を用います

莊嚴数珠

弘子 中啓でもかまいません

色衣 導師の法衣にもありますが普通は萌黄色を用います

大五条 大師五条でもかまいません

切袴

日課数珠 作法の説明等を行いますから日課数珠がよいでしょう

中啓

服装 服装は自由です

袈裟 寺院婦人会輪袈裟をかけるとよいでしょう

数珠 正式ではありませんが腕輪数珠がよいでしょう

□教授師

□接待

◎第三章——入壇式作法

ここでは、入壇式の差定に従った、導師の説草・作法（動作）と教授師（維那・司式）が指示する言葉等を掲載しました。これに表白等を組み合わせただけで、入壇式が行えます。

注 ■ 導師の説草・作法

□ 教授師の作法・指示

（括弧）は作法、その他は言葉による指示を表します。

（◆は戒尺の印ついでん＝本来は導師は槌砵ついでんを用います）

教導 □

（控室にて切り十念・同唱十念の唱え方、塗香の作法等を説明）
ただ今から本堂へご案内致します。私に続いてお進みください。

受者参列者入堂 □

（教授師が先進して入堂・着席）

◆このたび、当山阿弥陀如来の御前みまえにおいて、○○家先祖代々のご霊位を迎え、厳かに入壇式が開かれますことは、誠に喜ばしいことと存じます。私はお釈迦様の教え、宗祖法然上人からのお念仏の流れを汲むものとして、御本山の大僧正様からお伝えいただいた仏教徒としての生き方を、八百年余りの伝統の上にたつてあやまりなく

○○様ご夫妻にお伝え致します。ご本尊阿弥陀如来の慈光のもと、

○○家先祖代々の御霊の見守られる中で式を進めてまいりますので、心とからだ全体でお受け取りください。

◆まず初めに懺悔をしていただきます。何故懺悔をするのかといいますが、今までの自分をご先祖様からいただいたこの大切なからだを正しく養おうとせず、知らず知らず間違ったことをしてみたり、言葉をもてあそんで真実でないことを口に出してみたり、さらに心の中では自分が今まで経験し学んだことが絶対だと過信して、尊い仏様のみ教えまでも自分の都合のよいように解釈しようとする大それた気持ちで潜んでいたことに気がつかねばなりません。そこで我

聖水灌頂

が身を厳しく省みて、身と言葉と心の迷いより生じた今までの罪障を懺悔していただくのです。私が懺悔の文句を一句ずつ唱えますので、繰り返してご唱和ください。では合掌して、

皆様は導師の唱えたとおり、繰り返してください。◆一同合掌◆

◆我れ昔より造る所の諸（むろ）の悪業は◆
皆無始の貪瞋痴による◆
受者繰り返し、以下同じ

身語意より生ずるところなり◆

一切我れ今皆懺悔したてまつる◆

懺悔を終わります。

◆次に聖水灌頂という作法を行います。皆様が父母を縁としてこの世に生命（いのち）を享けてから今日に至るまで、仏様の眼（まなこ）を物差しとして見てみると、意識するしないにかかわらず多くの罪を作ってきたことにお気付きになるでしょう。そこで、仏様にお供えした浄らかな水を頭上にそそいで、心と身体を清浄に致しますから、合掌してお受けください。

□ 受者は合掌して頭を下げてください。◆受者合掌◆

（散杖を香煙に薫じ、小三鈷の印で加持してから水瓶の浄水に浸し、受者の頭上付近に当てて次の偈を唱えます。）

弥陀心水沐身頂 南無阿弥陀仏

聖水灌頂を終わります。

◆これで心とからだは清らかになりましたので、次に三帰をお授けします。三帰とは仏様を心から信頼して毎日を明るく生きる姿であり、また仏様の教えを守って常に正しく生きることであり、いつも仲よく生活して共生ともいきの社会を築くことであります。只今から私が、その約束の言葉を一句ずつ唱えますので、繰り返して唱和してください。

□

皆様は導師の唱えるとおおり、繰り返してください。◆一同合掌◆

◆私たちはいつまでも ◆
〈受者繰り返し、以下同じ〉

仏に帰依したてまつる ◆

私たちはいつまでも ◆

授与袈裟

法に帰依したてまつる◆

私たちはいつまでも◆

僧に帰依したてまつる◆

三帰三竟の授与を終わります。

◆次にお袈裟をお授けします。お袈裟は清らかな心となつた仏様のお弟子が身に纏う衣服のことで、別名解脫服げだつぷくと申します。また福田衣ふくでんねともいい、お米が育つ田圃を象つていて、この袈裟を掛けることによつて自らは勿論、他の人々の幸せをも願う広い心が、小さな稲がお米になるように身体に育ってくるのです。ではこれからお袈裟をお授けする作法を致しますから、両手でお受けください。

(受者に袈裟を渡しながら次の偈を唱えます)

大哉解脫服 無相福田衣 被奉如戒行 広度諸衆生 南無阿弥陀仏
お袈裟の授与を終わります。

◆次にお数珠をお渡し致します。このお数珠は日課数珠と申しまして、二連になつた浄土宗独特のお数珠で、法然上人のお弟子であつ

授与数珠



た阿波之介という人が考案したものと伝えられています。簡単にいますとお念仏を数える計算機の役目を致します。お念仏を唱えるときは二連の輪の部分を合掌した両親指にかけ、記子でしという房を手に前に垂らします。合掌をしないときには左手首にかけておきます。ではお渡し致しますからお受けください。

(受者に数珠を渡しながら) 南無阿弥陀仏

お数珠の授与を終わります。

◆○○様ご夫妻は、本日入壇式を受けられて、お釈迦様の教えを守り毎日を明るく正しく仲よく過ごすよう努めることを約束されました。しかし「言うは易く行うは難し」で、その約束どおりに毎日を送ることはなかなか難しいことです。時には守れないこともあるでしょう。そのようなときお導きくださるのが、ご本尊の阿弥陀様なのです。阿弥陀様は「すべての未熟な人々を万人平等に済すみ取ろう」というお誓いをたてられ、大きな慈悲の心で、いつでもどこでも私たちをお見守りくださっています。そのお誓いを信じて、心か

からお導きをお願いする言葉がお念仏、南無阿弥陀仏なのです。従って、本日のお釈迦様の教えを守るといふ約束は、取りも直さず自らの至らないところを阿弥陀様にお導きいただく約束に外なりません。つまり、この入壇式は皆様が「お念仏を喜んで唱える人」になるために行われたのです。しかし、お念仏を続けるということとはなかなか難しいことです。それから、せめて一日に何遍かはお念仏を唱えるよう、阿弥陀様に約束をしていただきたいと思うのです。これを日課の約束と申します。それでは、これから私が大切な御文をお授け致しますから、ご夫妻は「よく持つ」とお答えください。ご参列の皆様も、ご一緒にお願ひ致します。では合掌して、

□

皆様は導師の唱える言葉をしっかりと聞いて「よく持つ」とはつきり答えてください。◆一同合掌◆

◆汝^{なん}だち 今日^{こんにち}より始めて いのち終るまで日課念仏若干遍 誓つて中止せざれ よく持つや否や

(受者・参列者は「よく持つ」と答えます)

授与入檀式

◆これで本日の入檀式でお伝えすることはすべて終了致しました。どうかこれを機縁にして、お念仏を中心に毎日を明るく正しく仲よく過ごされますよう、そしてせっかく結んだ菩提寺とのご縁を末長く大切にしてください、お寺詣り・お墓参りを心掛けて菩提寺の興隆にもお務めくださるようよろしくお願い致します。それでは、入檀式を受けられ、正式にこのお寺の檀信徒となられたことを証するため「入檀証」をお渡し致します。合掌してお受けください。

(入檀証を授与します)

授与十念

◆それでは最後に私から十念をお授けしますから、しっかりとお受けください。まず合掌して、教授師の「お十念」の声に合わせ頭を下げていただきます。私が十遍のお念仏を「南無阿弥陀仏」と一遍ずつ区切って唱えますので、皆様は繰り返すようにしっかりとお唱えください。

□ ◆一同合掌 ◆お十念 ねん

攝益文	■	(導師発声)
念仏一会	■	(導師発声)
転座	■	(下高座、本尊前に転座)
請護念偈	■	(導師発声)
十念	■	(切り十念、または同唱十念)
無言一拝	□	導師の礼拝に合わせて、座ったままで礼拝をしてください。
導師挨拶	■	(無言一拝)
導師挨拶	■	(転向し受者参列者に祝辞)
導師退堂	■	(払子を振り、退堂)
閉会の辞	□	導師が退堂致しますので、合掌してお送りください。 これをもちまして、○○家の入壇式を終わります。長時間にわた りご苦劳様でした。控室にてお休みください。
受者参列者退堂	□	(教授師が先前して退堂)

応用編

●第一章——五戒授与を加えて

基本編の入壇式は、懺悔・三帰を主とした、いわば仏教入門式です。仏縁を結ぶという意味ではこれでも十分ですが、もう少し内容の濃い法会を実施したいという方のために取り入れてみたのが五戒です。五戒は仏教の在家信者が守るべき、不殺生・不偷盗・不婬・不妄語・不飲酒の五つの基本的な戒ですが、故大野法道大僧正はこの五戒について、

(五戒の) 条項は消極的に止悪の面で出されているが、実践となれば積極的なる行善註1の、慈愛・豊樂・節操・信賴・覚醒を含むは自然である。

と説かれて大いに活用することを勧められ、また故服部英淳勸学も、在家には五戒を授けるべきであるという見解を示されたそうです。

この式（以下五戒授与式と呼びます）は仏教徒、在家信者の心構えとして七仏通誠偈を説き、生活規範として五戒を授けようというものですが、もちろん、浄土宗の正式な授戒は円頓戒であるということを、十分承知していなければなりません。

差 定

五戒授与式は入壇式に五戒授与を加えたものですから、差定その他はすべて入壇式と同じです。授与三帰三竟の次に、授与五戒（七仏通誠偈を含む）を入れればよいでしょう。一応、差定だけをあげておきます。

◆五戒授与式

教 導

受者参列者入堂

開式の辞

喚 鐘

導師入堂

無言三拜

奉請

表白

轉座

受者焼香

先祖靈牌礼拝

導師開導

懺悔

灌頂

授与三帰三竟

授与五戒

授与袈裟

授与数珠

日課誓約

(以下基本編第三章 参照)

(応用編第三章参考資料 参照)

授与入檀証

授与十念

撰益文

念仏一会

転座

請護念偈

十念

無言一拝

導師挨拶

導師退堂

閉式の辞

受者退堂

注1

大野法道著『戒学点描』七八頁（浄土宗務所発行）

●第二章——修養会として

第一章までの三帰・五戒授与をメインに、勸誡・勤行・礼拝等を組み合わせ、修養会形式にした法会の実施マニュアルです。この場合、住職一人で行うのは困難ですが、寺族の協力を得ることにより実施可能となるでしょう。なお、基本編の入壇式は個別式を前提にしましたが、この修養会の場合は何軒かの檀信徒を対象とした集団式の方が効果的と思われると思います。

概要

約半日を費やした修養会の最後に、第一章の五戒授与式を行います。設定した基本的条件は次のようなものです。

受 者 入壇後比較的日の浅い檀信徒(集団式)

内 容 開白・勤行・勸誡・五戒授与式及びそれぞれのオリエンテーション

会 場 儀式は本堂、勸誡は庫裡(客殿)を使用

役割分担 住職・副住職・寺庭婦人の三名

所用時間 半日(午前十時〜午後三時程度)

また、実施に必要なマニュアルとして、

日 程 半日を有効に活用できる日程の一例

準 備 事前準備、本堂の荘厳等

差 定 開白・勤行の式次第、役配と衣帯等

導師説草 五戒授与の説草

教導要領 オリエンテーションの内容

勸誡資料 勸誡講話の概要

等を収載しました。これも入壇式のマニュアルと同様、いずれも参考資料ですから、実施に当たっては各寺院の事情等を考慮のうえ、取捨選択していただきたいと思います。

日程(時間割)

時間	場所	内容	役割分担		
			住職	副住職	寺庭婦人
一五時〇〇分		成満			
一〇分	本堂	五戒授与式	○	○	
一四時〇〇分	庫裡	オリエンテーション④		○	
五〇分		小憩			
一三時〇〇分	庫裡	勸誡②	○		
	庫裡	中食・休憩	本堂準備	本堂準備	
一二時〇〇分	庫裡	オリエンテーション③		○	○
二〇分	本堂	勤行	○	○	
一一時一〇分	庫裡	オリエンテーション②		○	
四〇分	庫裡	勸誡①			
三〇分		小憩			
一〇時〇〇分	本堂	開白		○	
	庫裡	オリエンテーション①		○	
九時三〇分	庫裡	受付			○

準備

準備は、基本編第一章を参考にしてください。とくに異なるのは次のような点です。

◆案内状の作成

案内本文は、入壇式を修養会に変える等、例文に若干手を加えてください。所要時間が長くなりますから「〇時から〇時まで」と明記すること、中食(昼食)の準備があること等を付け加え、時間割(前記)を同封するとよいでしょう。

◆表白の作成

これも入壇式表白を流用します。左の例文は一部を変更、省略したものです。

謹んで按ずるに、如来の大悲は万機を普く利益し給い、最後の一念に至るまで、皆悉く摂化し給う。況んや至心に懺悔して、三宝に帰依する者に於てをや。爰に信心の受者若

千名あり。仏日の光を受けて、仏性の萌芽を発し、如来の正法を信じて、浄土の法門に入る。仍て今月今日を卜して、この道場に参集し、念仏聞法して以て、一会の別行を修し奉る。仰ぎ冀くは、本尊阿弥陀如来、大恩教主釈迦牟尼世尊、六方恒沙証誠諸仏、観音勢至諸菩薩等、哀愍覆護して、所願意の如く成就せしめ給わんことを。敬つて白す。

◆本堂の準備（基本編第一章参照）

入壇式と異なるのは、開白・勤行があることです。開白・勤行は通常のまままで勤め、最後の五戒授与式で入壇式のように配置換えをしますので、受者の中食の間に設営することになります。

◆中食の準備

□弁当の手配

仕出しの折詰弁当が最も簡便です。大体の人数で早めに手配をして
おき、受者確定後数量を決定します。

□食作法

全員で中食をいただくときに読みます。大きめの紙に書いて壁に張るか、机の上に置けばよいでしょう。

差定・衣帯

開白・勤行・五戒授与式の三座を勤めます。開白・勤行は、浄土宗発行の『浄土宗信徒日常勤行式』に準ずる差定にしました。五戒授与式は第一章と同様で良いのですが、入壇式とは異なりますので、授与袈裟・授与数珠・授与入壇証は省きました。

◆開白〈衣帯は入壇式と同様、基本編第二章参照〉

教導

(オリエンテーション①参照)

受者入堂

喚鐘

三通三下

導師入堂

香偈

三宝礼

四奉請

懺悔偈

十念

表白

開經偈

誦經
(四誓偈)

本誓偈

十念

撰益文

念仏一会

総回向偈

十念

無言一拜

導師退堂

受者退堂

導師登高座

以下総回向偈十念まで導師発声

導師下高座

◆勸誡〈衣帯は茶衣・如法衣、または改良服・威儀細〉

勸誡師入堂（場）

木魚念仏

勸誡 誡

（勸誡資料参照）

勸誡師退堂（場）

木魚念仏

◆勤行〈衣帯は入檀式と同様、基本編第二章参照〉

教 導

（オリエンテーション②参照）

受者入堂

導師入堂

導師三礼

三唱礼

開経偈

導師登高座 以下総回向偈十念まで導師発声

誦 経（四誓偈）

本誓偈

十 念

摂益文

念仏一会

礼 拝

礼 竟 文

回 向

総回向偈

十 念

導師三礼

導師退堂

受者退堂

教授師句頭

(例) 現前受者業障消滅無諸障碍阿弥陀如来哀愍護念

導師下高座 三唱礼

◆五戒授与式《衣帯は入檀式と同様、基本編第二章参照》

教 導

受者入堂

喚 鐘

導師入堂

(オリエンテーション④参照)

三通三下

無言三拜

奉請

表白

転座

受者焼香

先祖靈牌礼拝

導師開導

懺悔

灌頂

授与三帰三竟

授与五戒

日課誓約

授与十念

撰益文

念仏一会

三奉請散華（基本編音声の項参照）

導師は外陣向きに転向し登高座

転座

請護念偈

十念

無言一拝

導師挨拶

導師退堂

受者退堂

導師は下高座し本尊向きに転向

●第三章——参考資料

応用編に取り上げた、五戒授与式・修養会のための資料です。五戒授与式は、入壇式に五戒の授与を加えただけです。授与五戒の導師説草のみを、また修養会の資料としては、四回に分けた教導（オリエンテーション）の要領と、勸誠講話を収載しました。このうち勸誠は、受者に分かりやすく教えを説くことが大切で、当然自分の言葉で話すことが必要ですから、勸誠講話の資料は、話し言葉でなく必要と思われる概要を記しました。適宜ご活用ください。

□授与五戒

◆さて、お釈迦様が説かれた戒めは、仏弟子、信者などその立場により様々であったと伝えられています。しかしそのすべてに共通するものは決して難しいものではありません。

それは、

諸惡莫作

もろもろの悪を作すことなかれ

衆善奉行

もろもろの善を奉行せよ

自淨其意

みずからその意を淨くせよ

是諸仏教

これ諸仏の教えなり

という十六文字なのです。「なんだ、そんなことか、当たりまえじゃないか」と思われるかもしれませんが、この言葉はお釈迦様をはじめ七人の仏様がともに勧められたとされる「七仏通誡偈」と呼ばれるお諭しで、仏教のすべての教えがこの十六文字含まれているともいわれているのです。悪いことをしない、善いことをする、頭ではすぐに分かる当たり前前のことですが、いざ実践するとなるとなかなか難しいもので、悪いことをするつもり

はなくても、つい善くないことをしてしまふのが、悲しいかな私ども凡夫ではないでしようか。

先ほどの懺悔のときにもお話し致しましたように、私どもは身と言葉と心の迷いで知らぬ間に罪を重ねています。だからこそ「心を淨く保ちなさい」と戒められているのです。これはとても大切なことでして、心が清らかなになればおのずから行いにも現れ、自然と善くないことはできなくなってくるのです。この「心を淨く保つ」ことが、すべての仏様共通のみ教えなのです。では心を淨く保つにはどうすればよいのでしょうか。私たちには、八万四千といわれるお釈迦様の多くの法門の中から、法然上人がお選びになられた「お念仏」という有り難い教えがあります。このお念仏こそが心を淨く保つ何よりの薬なのです。腹の立ったとき、悲しいとき、不安なとき、どんなときにもお念仏を唱えますと、不思議と心が落ち着いてきます。法然上人のお弟子で、浄土宗の第二祖であります聖光上人は、平素お念仏を唱えるには、時間や場所や服装や姿勢などを選ばなくてよろしいとお説きになられました。改まって唱えなくても、いつでもどこでも唱えればよいのです。このようにお念仏が普段の生活に溶け込んでまいりますと、自然に心を淨く保つことができるようになってくる、これこそがお念仏の一番の功德と申せましょう。

ところで私たちは、目に見えるもの、形や言葉に現れるものがありまさんと、何となく不安に感じてしまうものです。心を淨く保っていても、どのような日々を送ればよいのかを示されませんと、よりどころがなく行動も頼りなくなりがちです。

そこでお釈迦様が示されたのが「戒」という仏教徒の生活規範です。戒には、仏弟子・信者・男女等によつて様々なものがありますが、今日お伝えするのはその中でも最も基本的な「五戒」という教えで、すべての戒の根本であり、在家の仏教信者の守るべき五つの戒めです。それではこの五戒について一つずつお伝え致しましょう。

第一番目は「不殺生戒」、これは「生き物を殺さない」言い換えれば、「あらゆるものに慈しみの心をもつ」ことにほかなりません。

第二に説かれるのが「不偷盜戒」、つまり「盗みをしない」という戒めでして、言うならば「物を大切にし、施しの心をもつ」ことです。

第三は「不邪淫戒」、これは「淫らな行為をしない」ということですが「慎み深い行いをする」と理解すれば良いでしょう。

四番目は「不妄語戒」、「嘘をつかない」つまり「正直に真心をもって語る」ということです。最後は「不飲酒戒」といい、これは「酒を飲まない」ということですが、酒は飲み過ぎ

ますと人に迷惑をかけることがしばしばありますので、これを戒めたもので「酒に飲まれない」そして「自分を見失うことなく、正しい行いをする」とことと見えるでしょう。

それでは只今から、お伝え致しました「七仏通誠の偈」並びに「五戒を」皆様にお授けする作法を行いますので、私が「よく持つや否や」と申しましたら、大きな声で「よく持つ」と仏様にお約束いただくようにお願い致します。では、合掌して、

諸仏護持するところの七仏通誠 並びに釈迦牟尼世尊説きたもうところの五戒

我れ今 なんぢら 汝等に授く 汝等 今身より未来際を尽くすまで その中間において犯すことを得ざれ よく持つや否や

〈受者・参列者は「よく持つ」と答えます〉

〈以上三遍繰り返し〉

皆様しっかりとしたお声で「よく持つ」とお約束いただきました。これは私に対する約束ではなく仏様との約束です。今のお気持ちを生涯忘れることなく、生き甲斐を感じた人生を全うし、安らぎのある生活をするとともに、香り高い人格をつくりあげて、家庭、職場、社会において、明るく正しく仲よく過ごすようお励みいただきたいと存じます。

七仏通誠偈、並びに五戒の授与を終わります。

教導要領

儀式や作法等の心得を解説することは、導入部としてとても重要です。要領良く、簡潔に話すことも大切ですが、いろいろな作法について説明することになりますから、あらかじめ作法等を復習しておくことが必要です。

◆オリエンテーション①（開白の前に）

皆様、本日は当山の檀信徒修養会によるこそご参加くださいました。

仏教は、迷いを断ち切り、真理への目覚めを求める教えですが、私たちの現実の生活は楽しみを追い求め、浮わついた気持ちに支配されやすく、欲しい、憎い、妬ましいという思い、すなわち煩惱がからだと心を蝕んでいます。皆様がこの修養会の体験を通して、仏教徒としての真実なる生き方に気づかれ、家庭はもとより職場や社会のために、今まで以上に役立つ何かを掴んでいただければ、それは仏様はじめ、各家のご先祖皆々様のお喜びにとどまらず、当山にとりましても無上の喜びにたえないところでございます。

□心構え

これから修養会のあらましについてご説明をいたしますが、正しい信仰は「まず聞法ありき」と言え、それは理解と体験を通してはつきりと自覚できるものです。六つの感覚器官すなわち眼・耳・鼻・舌・身・意を研ぎすまし、身体全体で受け取るという心持ちが大切です。このために勧誡では仏様の教えを分かりやすくお話しし、勤行では念仏・礼拝を通して教えをからだで体験していただきます。最後には、お話の内容を具体的に儀式の上からお授けしますが、疑いや思い上がった心があると、せっかくの大切なみ教えが身体を通過するだけで、身と心に伴わない結果を生じます。どうかこの機会を一生に一度の仏縁と思われ、いたずらに過ごすことのないようお願いをいたします。

□塗香・触香

本日の修養会では、初めに本堂に入り、本尊阿弥陀如来様をはじめ諸々の菩薩方、各家先祖代々のご霊位の前で「開白」という法要をお勤めしますが、お勤めに先立ち、身と心を浄らかにするために塗香という作法をしていただきます。塗香は、まず左の掌にのせた粉状のお香の上に右の掌を交差させ、擦り合わせるように回転させて左手を上、そして

もう一度回転させて元の形に戻します。次に胸の前で合掌の形をとり、五本の指が交わるよう交差させて両手を開き、親指を立てるようにして下腹部まで下げて行きます。塗香が終わりましたら、合掌して念仏を唱えながら本堂に入堂いたします。合掌は胸の前に両掌をしつかりと重ね合わせてください。その合掌の両親指の外側に数珠をかけ、大きな声で念仏を唱えましょう。また本堂の入り口には象をかたどった香炉、象香炉が置いてあります。その上を渡ることによって爪先から頭頂に至るまで瞬時に清める触香の作法です。この触香は、昔から男は左足から、女は右足から渡ることになっていきますので、そのように跨またいでいただきます。

□十念

開別の法要はただ今お配りした経本『浄土宗信徒日常勤行式』に従ってすすめてまいります。慣れないながらも大きな声で勤めましょう。お勤めの途中で導師が「同唱十念」といわれたら、一緒に十遍のお念仏を唱えます。唱え方は初め四遍までを一息で、息をついで後の四遍を一息で、都合八遍まで「ナムアマミダブ」と唱えます。九遍目は「ナムアマミダブ」と「ツ」を付け、最後の十遍目は頭を下げながらゆつくりと「ナムアマミダブ」

と唱えて、身と心で敬いの気持ちを表します。

□開白法要

お勤めの中ほどで導師による表白が読まれます。これは本日の修養会が迎えられた仏縁を喜び、式が無事円満に終了することを諸仏・諸菩薩にお願いする御文です。

次いで浄土宗のよりどころの經典『無量寿経』の大切な一節である四誓偈を拝読、続いて教えの真髓となるお念仏を唱えます。どうかお念仏は各自の全身全霊を打ちこんで唱えて下さい。お念仏の功德が我が身に及ぶことは申すまでもなく、その功德を縁ある人々にも振り向けるよう願うという慈しみの心が、念仏者を浄土に往生させて下さる基もととなるのです。

□勸誡

開白法要が終わるといったん控室へ戻りますが、その折も念仏を唱えながら歩いてさがります。自分の席に着いた方から順次座って下さい。小憩の後、住職の勸誡が始まります。勸誡とは、よい心や行いを勧め、悪い心や行いを戒めるという意味のことばで、皆様の信仰が誤りなく進むように、段階をふみながら導いて下さる講義のことです。住職から、仏

様の示された戒めや教えに随うことがどれほど有り難いことであるかお話がありますので、しっかりとお受け取りください。

◆オリエンテーション②（勤行の前に）

□念仏

今までの自分の生活が、仏様の大きいなる慈悲の中にありながらそれに気づかず、有り難いとも思わず、不平不満にあけていた自分自身というものを、勧誡は示してくれました。しかし、それをたとえ頭で理解できても身体ではつきりと受け止めなければ、心からすまなかつたという気持ちは生まれません。それを感じるためには、身体を通して勤行・礼拝・念仏を実践してみることが最も大切です。

念仏は一人で唱えるのも結構ですが、多くの同行と勤めると心の集中や高まりは倍加するものです。唱え方はまず導師の句頭「ナムアーミダーブ」で木魚が一下入ります。二唱目より受者の皆様も木魚を打ちながら唱えて下さい。木魚は念仏の調子を整える楽器と心得て、念仏は大きな声で木魚は優しく、という気持ちで勤めてください。念仏中は阿弥

陀様から目を離さず、我が心中の思い必ずや届かん、と強く心を励まし、怠け心を克服するよう心掛けてください。

□ 礼拝

礼拝は、まず合掌した正座の姿からゆっくりと立ち上がり、阿弥陀様のお姿を仰ぎます。その後腰をおろして、額を床につけ、両掌を平らに仰向けて耳のあたりまであげて阿弥陀様の御足みあしを頂くのです。なぜ阿弥陀様の御足を我が手で頂くのかといえば、阿弥陀様は私達の願いに応じてどんな所へでも現れて下さるからです。そして私たちは、御足を両掌に頂戴し、敬い順う姿を持って心から受け取るのです。この礼拝を無言ではなく、念仏を三遍唱えるうちに一度行います。

私が初めにやさしい節のついたお念仏を唱えながら礼拝を始めますから、皆様はその後から導師に合わせて念仏礼拝をして下さい。数回繰り返すうちに要領がわかると思いますが、礼拝が終わると、私と導師で礼竟文という文を称えます。いま勤めた礼拝により、過去・現在・未来の三世にわたる一切の罪業を心から懺悔するという意味のことばです。皆様もそのような心情でお勤めください。

◆オリエンテーション③（中食の前に）

□中食

午前の日程が終わりましたので、これから中食をいただきます。食事の作法も仏道修行の一つですから、二、三心得をお話しておきます。私たちが食事をするということは、やむなく多くのものの生命を殺め、そのお陰で身体も養われているのですから、世のため人のために自分が今まで天地一切から受けたご恩を返してゆくことを忘れてはなりません。したがって量の多少、味の濃淡を問うてはならず、食べ切れないと思った場合は始めに取り分ける等、粗末に扱わぬよう心掛けてください。殺めたものの生命を精一杯に活かす努力を惜しんではなりません。

また休憩中も雑談はせず、念仏を離れないように心がけて下さい。

【食作法】

《第一式》

(教授師) 合掌。食前のことば。

(全員で) 本当に生きたがために、今この食をいただきます。与えられたる天地の恵みを感じたいします。(同唱十念) いただきます。

(食事)

(教授師) 合掌。(同唱十念) ごちそうさま。

《第二式》

(教授師) 合掌。食前のことば。

(全員で) 我ここに食を受く。つつしみて天地の恵みを思いその労を謝し奉る。
(同唱十念) いただきます。

(食事)

(教授師) 合掌。食後のことば。

(全員で) 我れ食を終わりに心豊かに力身に満つ。おのがつとめにいそしみ、誓って御恩に報い奉らん。(同唱十念) ごちそうさま。

◆オリエンテーション④（五戒授与式の前に）

皆様に法を伝える時機がいよいよ熟してまいりましたので、本日の最も重要な式である「五戒授与式」の作法と心得について説明します。

□心得

まず開白と同じように、入堂前に塗香・触香の作法を致します。その後、私に続いて入堂・着座してください。持ち物は袈裟・数珠以外は何もいりません。この式を受けるために皆様は勧誠を受け、勤行・礼拝を勤めてきたのです。皆様は今まさに身体に宿していた仏になる種が開こうとしている段階に至ったわけで、この式により身体中にその喜びが満つる瞬間が刻々と迫っているのです。どうか心を整え、導師の発することばを一言一句聞き漏らすことのないよう、しっかりと受け取られるようお願いしておきます。

□式次第

法要はまず阿弥陀様とお釈迦様、そして十方の仏様方を蓮華の花をまいてお招き致します。導師が皆様の方に向かって座に着きましたら、お焼香の作法がありますが、時間の都合で代表の方に行っていたいただきますので、その時には皆様もお焼香する気持ちで合掌して下さい。

続いて各家先祖代々の諸精霊位に合掌礼拝を致しますので、私の言葉に従ってお勤めください。

それから導師の説誠が始まります。途中で導師からの問いかけ等がありますが、詳しくは導師の指示により受けていただきます。私が「受者合掌」と言いますしたら、合掌してください。皆様が受ける作法は大きく分けて導師の唱える御文を繰り返す場合と、問いに答える場合があります。導師の問い「よく持つや否や」に対しては、はっきりと「よく持つ」と答えてください。

説誠がすべて終わると念仏に入ります。導師はその間に本尊前に向き直り、仏様にこれからのお導きとご加護をお願いします。本尊前での定められたお勤めが終わると式はすべ

て終了となります。

どうか今日一日だけは母親の懐に抱かれた赤子のように素直な心で、今までの我がまま一杯の自分を反省し、今日からは仏様を離れず、仏様の教えに従って生きていこうとの誓いを立てられるよう、ご精進を期待してやみません。同唱十念。

勸誠資料①

本日の修養会は、聞法により仏教徒としての自覚を養い、念仏・礼拝を勤めて自らの罪障を懺悔し、最後に仏弟子として五戒を受けるための法座である。

□授戒

五戒の授与は、最も初歩的な授戒である。授戒とは釈尊の説かれた戒法を授け、仏教信者に導入する儀式であり、その戒とは清浄な行為、道徳というような意味である。仏教では、自律的道德を「戒」と呼び、他律的道德を「律」と呼ぶが、戒は自ら法に目覚めて、行わずにはいられない気持ちの中から自然に実践されて行くものである。

釈尊は「一切衆生 悉有仏性」即ち衆生はすべて真理に目覚める素質を持っていると説かれていたが、我々はこの素質を活かすことができず、せつかくいただいた人間としての生の意義を自覚することなく無為な日々を過ごしているのである。そこで釈尊の教えにしたがひ、人間としての自覚を促進し、真に生き、実に進む道筋を伝えることによって、生き甲斐のある人生、安らぎのある生活を目指す決意の節目とするのが授戒である。

我々は迷いの世界に生きている。仏教では、迷いの世界、苦しみの世界を六道と称する。戒学の権威であった故恵谷隆戒師はこの六道を、地獄は怠け者で働くことの嫌いな人、餓鬼は飲みたい食いたいの欲に日夜苦しんでいる人、畜生は鞭で打たれて（他人に指図されて）嫌々働いている人、修羅は怒り腹立ちの心をもって争いばかりしている人、人間は財・色・食・名誉・睡眠の五欲にとらわれている人、天上はこれより上はないと思ひ自分が一番偉いと慢心している人であると表現された。そして、この六道の苦しみをすべて背負ひ、それを断ち切るこそが真理に目覚めることと知りながらも、様々な欲求不満や劣等感に捕らわれて、迷ひ苦しみ悩み続けているのが我々人間の現存在であり、授戒はこれらを取り除く心理療法であると説かれている。

しかしながら病気を治そうという強い意志がなければ病を克服できないように、戒を受

ける受者側が、この授戒を受けることによって生まれ変わった人間として再出発し、香り高い人格を形成してゆこうという意欲がなければ、大きな効果を望むことはできないであろう。したがって授戒に当たっては、新たな出発としての心構えをもつために、授ける側も受ける側も真剣に自己を反省し、過ちを懺悔することが肝要なのである。

また、戒を受けるということは自らの香り高い人格の形成とともに、豊かで平和な社会の実現に向けて励む約束をすることでもある。我々はつい自分の幸福のみを追い求めるが、積尊の願いは世の中すべての人々が幸せに生きることであり、その実現を求めること、そのための努力を積み重ねることが仏教徒、仏弟子としてのあるべき姿なのである。

□懺悔

授戒に当たっては自己を反省し、懺悔することが重要であると述べたが、本日の式においても、まず懺悔を行うのである。我々はたとえ自他共に認める立派な聖人君子であろうと、それは所詮人間の目から見たものであって、自分自身の行っていること、思っていることを完全なる人格者であるみ仏と較べてみれば、そのいたらなさ、愚かさは明らかであって、これを自覚すれば自然とすべての行いに関して懺悔の気持ちが生ずるのである。

我々の行いは、身体による行動と言葉による表現、そこに潜む目に見えない心に分けることができるが、この三つによる行いを「身語（口）意の三業」といい、一切の生活活動はこの三業につくされるといわれる。

行いの中にはよい行いもあれば、悪い行いもある。悪い行い、つまり悪業は、貪（むさぼり）と瞋（いかり）と痴（おろかさ）の三毒により引き起こされるものであり、これが行動に現れると、殺生（殺す）偷盜（盗む）邪淫（淫ら）となり、口に出せば、妄語（嘘）両舌（二枚舌）悪口（中傷）綺語（でまかせ）となるが、これらの悪業は『梵網經』に「自ら罪有りと知れば当に懺悔すべし懺悔すれば即ち安楽なり懺悔せざれば罪益々深し」と説かれるように、懺悔することにより消除することができるのである。

では、懺悔するにはどうすればよいのかといえば、念仏を唱えることが第一である。善導大師は「般舟讚」に「念々称名常懺悔」といわれ、阿弥陀仏の名号を唱えることが懺悔であり自然に罪障を消滅すると説かれている。つまり普段から念仏を唱えることにより、特に懺悔の意志をもたなくてもそれが知らず知らずのうちに懺悔の行となるのである。

本日の儀式では「懺悔の言葉」を唱えて、昔より造る所の悪業の一切を懺悔し、身も心も清浄となつて戒を受けるのであるが、そのときに唱える文は次のとおりである。

我れ昔より造る所の諸もろもろの悪業は

皆無始の貪瞋痴による

身語意より生ずる所なり

一切我れ今皆懺悔したてまつる

勸誠資料②

□三法印

釈尊の教えは森羅万象の根本法則、根本道理である縁起の法、即ちすべてのものは移り変わり（諸行無常）単独で存在するものはなく（諸法無我）持ちつ持たれつ調和を保っている（涅槃寂静）という宇宙の三大法則（三法印）である。仏教徒のために定められた戒もまた、この三法印を基調として説き明かされたものであり、人間として当然行うべき筋道であって、仏教徒とはこの戒にしたがって生活する人なのである。

□三帰戒

釈尊が説かれた最初の戒は「三帰戒」即ち三宝（仏法僧）に帰依することであり、仏教徒となるものは、まず始めに必ず受けなければならぬ戒である。三宝の宝とは世の中で最もすぐれたものという意味であり、帰依とは敬い従うことであるから、仏に帰依することは釈尊を敬うこと、法に帰依するということは釈尊の説かれた教えに従うこと、僧に帰依するということは仏法に従う人々（集団）に帰依することである。

釈尊は宇宙の真理を悟られ、心の迷いや煩悩（煩惱）のない明るい日々を過ごされた、つまり仏に帰依するということは「明るく」生きることである。釈尊の説かれた法は根本法則であり、いつの世でも決して変わることはない正法であるから、法に帰依するということは「正しく」生きることである。また、仏法に帰依した人々は、和合即ちお互いに助け合つて過ごしているのであるから、僧に帰依するということは「仲よく」暮らすことである。

このように三帰、つまり三宝に帰依することは、分かりやすくいえば「明るく 正しく 仲よく」暮らすことをみ仏に約束することなのである。この三帰を授ける作法は「三帰の文」を唱えて行うが、その文は次のとおりである。

わたくし

私たちはいつまでも仏に帰依したてまつる

わたくし

私たちはいつまでも法に帰依したてまつる

わたくし

私たちはいつまでも僧に帰依したてまつる

この文を導師にしたがつて三度ずつ唱和するのである。

□七仏通誠偈

釈尊の教えの基調は三宝印であるが、人間の機根（個性）は千差万別であるため、それぞれの個性に合わせて説かれた教えは八万四千の法門といわれる。これは実際の数ではなく、沢山の教えという意味であるが、同様に戒も比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷等、出家、在家により各別の戒めを定められた。しかし、そのすべてに共通することは、

諸悪莫作

もろもろの悪を作してはならない

衆善奉行

もろもろの善を行

自淨其意

みずからその意を淨くせよ

是諸仏教

これは諸仏の教えである

というものであつて、これは釈尊をはじめとする七仏がともに保持したとされる「七仏通誠偈」と呼ばれる最も基本的な戒である。わずか十六文字の中に仏教道德のすべてが含まれているといつても過言ではない。

悪をなさず善を行うのは頭では当然のことと理解できるが、これをすべてにおいて実践するのは至難の業であり、我々は悲しいかな罪悪生死の凡夫ゆえ、意識するしなにかかわらず罪を重ねて生きているのである。ここに諸仏が「自浄其意」つまり心を浄く保つように諭される重大な理由があるといえよう。懺悔のところて述べたように、心の持ち方が行いに現れるからであり、心が浄らかであれば、おのずからその行いも善行となるのであるから、自浄其意こそが戒の最も肝要な点であると心得ねばならない。

では、貪瞋痴の三毒に汚された心を浄く保つにはどうすればよいのかといえは、念仏を唱えることに尽きよう。念仏を唱えると、仏の力により自然に罪障が消滅されることは前に述べたが、同時に心が安らかなになり、腹立ちや怒りも知らぬうち消えて、浄らかな心を保つことができるのである。

□五戒

心を淨く保つことによつて、止惡修善の實踐ができるのであるが、その方法を具体的に説き明かしたものが、五戒、十戒、二百五十戒等の戒めである。浄土宗の正式な授戒会では三聚淨戒が授けられ、十重禁戒と四十八輕戒が説かれるが、本日の式においては、多くの戒の基本であり、出家在家を問わず実行しなければならない要目である五戒を説くのである。

五戒の道德律は仏教に限らず他の宗教においても説くところであるが、仏教の五戒は生命尊重の精神から規定されたものであつて、この点が他の宗教と異なる所である。仏教のものの見方、考え方はすべてのものに生命、使命、価値を見いだし、それを尊重し育成するものであり、その中に仏性を認めることである。

仏教に説く五戒は、

不殺生戒

すべての命あるものを殺さない

不偷盜戒

与えられないものを盗まない

不邪淫戒

淫らな行いをしない

不妄語戒

嘘偽りをいわない

不飲酒戒

酒を飲んで迷惑をかけない

というものであるが、先に述べた、すべてのものの生命、使命、価値を見いだし、それを尊重し育成するという考え方からこれを理解することが必要であり、これは慈悲心、孝順心をもって実践することでもある。慈悲心とは慈しみの心をもって育む心であり、孝順心とは真理に従う心であつて、人間として、仏教徒として、必ずこの二つの心をもってすべての行動をしなければならぬのである。

このような観点から五戒を考えると、

殺さない

生物のみならず、すべてのものが有意義に働くように、慈しみの心を持って育むことである。

盗まない

ものを盗まないだけでなく、すべてのものを大切に、無駄をしないことであり、さらに与える心を持つことでもある。

淫らにしない

男女関係はもちろん、人間としての礼節を尊重し、自らの使命を全うして、慎み深い行いをするのである。

嘘をつかない

口で嘘を言うことだけでなく、偽りの行為、考えも含めた嘘を戒め

るものであり、釈尊の教えにしたがい正直に生きることである。

酒を飲まない

酒に飲まれて放逸の行いをするのを戒めるものであり、覚醒（めざめ）の生活の中に正しい行いをするのである。

というように受け取ることができるのであり、これが大乘戒の精神であるといつてよいであらう。

本日授ける戒は、以上の三帰、七仏通誡、五戒である。このうち七仏通誡偈と五戒は、作法の場合は併せて授けられるので、導師から「よく持つや否や」と問われたときは、生涯この戒を保つとの心構えで「よく持つ」と答えていただきたい。

□日課誓約

浄土宗の教えを伝える儀式では、必ず導師が生活の中に念仏を忘れず日々を過ごすよう勧め、受者は生涯念仏を唱え続けることを仏に誓うのであり、これを日課誓約という。すでに述べたとおり、念仏は戒を持つうえで最も大切な行法である。念仏を唱えて罪業を消除することにより、日々戒を持つことができるのであり、この意味では念仏即ち戒といつても過言ではない。

日課誓約の作法は、先の戒の授与と同様であり、戒師の「よく持つや否や」との問に対して「よく持つ」と答えるのである。

以上、これから執行する五戒授与式についての勸誡を行ったが、あくまでこれは前方便であり、儀式で導師から伝授されてはじめて戒が身につくのである。そして受けた戒を持つには、今も述べたように、念仏が生活に溶け込むことが最も大切であるということを心にしっかりと畳み込んでいただきたいのである。同唱十念

世はマニュアル時代です。「坊さんにマニュアルなど必要ない」そうお考えの方も沢山おいででしょうが、考えてみれば『法要集』は法式のマニュアル本ですし、近年多く出版されている、法話や五重相伝・授戒の解説書等も、間違いなくマニュアルです。コンビニやファストフード店等の対応に、マニュアル教育を利用する長所は、誰にでもある程度のことができるということです。確かに、誰もが同じようで味がない、また心が通っていないと評価する人もいます。しかし、長所を全く利用しない手はありません。もちろん、いつまでもマニュアルに頼っていては進歩しませんし、自分のものになりませんから、要は使い次第ということになるでしょう。

新しい檀信徒を対象にした教化法として研究した、「住職と寺族でできる入信式」(平成四年度法式研究部)、「住職と寺族でできる授戒儀礼」(平成七年度現代教化儀礼研究班)の二つを、このたび研究代表・福西賢兆主任研究員指導のもとに大幅に編集し直し、マ

ニュアル形式の「入壇式の手引き」として発行しました。

一般に、新しい行事を敬遠する理由の第一は、行い方がよく分からないこと、そして教化経験の少ない教師の多くが苦手とするのは、人前で話をする事です。どのような方法で行うか、どんな話し方をするか、慣れてしまえばなんでもないことでも、最初はなかなかうまくいかないことがよくあります。コツがわからないためといってもよいでしょう。

このマニユアルは、入壇式を実施するコツをつかんでいただく初歩的なものです。あくまでも慣れるまでの臨時措置で、要領が分かったあとは、自分流にアレンジして、より良いものに作り上げていただきたいと思えます。

最後になりましたが、編集に当たって、適切な助言やご指導をいただいた、浄土宗出版室小林正道室長、総合研究所鷲見定信主任研究員、細田芳光研究員、村田洋一研究員をはじめ、本書出版にご尽力いただいた皆様に、厚く御礼申し上げます。

(編集担当 浄土宗総合研究所研究員・熊井康雄)

研究代表 福西賢兆

研究担当 田中勝道

熊井康雄

渡辺俊雄

斉藤隆尚

福西賢雄

新しい檀信徒のために 布教資料 第10集

平成10年3月15日

編集・発行 浄土宗総合研究所
〒105-0011
東京都港区芝公園4-7-4
明照開館内 TEL 03-5472-6571
FAX 03-3438-4033

印刷 株式会社共立社印刷所

